奈文研ニュース

No.52 Mar.2014

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市佐紀町247番1
http://www.nabunken.jp/

新庁舎の建設に向けて

2013年度は、平城宮跡発掘調査部設立50年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部設立40年の節目の年でしたが、奈良文化財研究所の本庁舎（旧庁舎）にとっても忘れることのできない年になりました。

旧庁舎は、奈良県立医科大学附属奈良病院として昭和39年に建てられた建物です。その後、奈良県立奈良病院に移管されましたが、昭和52年の平松町への病院移転を受けて、国が敷地と建物を買い上げ、２カ年にわたる建物の改装工事を経て、昭和55年から奈文研本庁舎としての使用が始まりました。

以来、奈文研の調査研究拠点として33年間慣れ親しんできましたが、さすがに築50年近くなると、床や壁面に老朽化によるクラックが多数入り、雨漏り等も顕著になってきました。また、研究資料や図書資料の増加にともなう狭隘化も深刻な状況となり、耐震診断の結果でも建物の安全性が危惧されるようになりました。

このため、本庁舎建替の予算要求を長くおこなってきましたが、ようやく2012年度から建替の予算が認められ、新庁舎の建設が実現する運びとなりました。今年度には新庁舎建設に向けた動きが本格化し、宮跡内にプレハブの仮設庁舎を設置し、年末に大規模な引越し作業を無事に終えました。また、本年度に実施した試掘調査の結果をもとに、新庁舎の建物位置が旧庁舎の基礎と極力重なるように実施設計を進めているところです。

現在、旧庁舎の取り壊し作業が進行していますが、取り壊し工事後に建設予定地の発掘調査をおこない、2014年10月から新庁舎の建設工事に入る予定です。新庁舎は2016年３月末に竣工予定で、それまでの約２年間は仮設庁舎での業務となります。関係者や平城宮跡の利用者、周辺住民の皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくご理解とご協力をお願い申し上げる次第です。

新庁舎は、現時点の構想では地上４階、地下１階建てで、旧庁舎の約1.5倍の延べ床面積を予定しています。建物の間取りや設計にあたっては、各部署選出の本庁舎地区再開発計画検討WGのメンバーが基本計画を策定し、部課長会議による調整と検討を経て、所員の意見をより多く設計に反映できるように作業を進めているところです。

２月から解体作業がおこなわれている旧庁舎は、奈文研の調査研究活動の拠点として、これまで多くの人々に親しまれ、数々の業績を支えてきた陰の功労者です。2014年１月31日には、旧庁舎の解体前に関西在住の奈文研OBに声をかけて「奈文研本庁舎とのお別れ会」を開催しました。旧庁舎の研究室を根城に調査研究に励まれたOB達の旧庁舎に対する愛着はひとしおで、なごりを惜しむ声とともに、若かりし頃の思い出話に花が咲きました。

生まれ変わる奈文研本庁舎は、より快適で高度な調査研究環境の整備を目指すとともに、耐震対策を施して建物の安全性の強化を図る等、新たな時代の文化財研究を牽引するナショナルセンターに相応しい機能を充足させた施設にしたいと考えています。

（所長　松村 恵司）

「奈文研本庁舎とのお別れ会」から

発掘調査の概要

藤原京跡左京三条三坊の調査（飛鳥藤原第178-7次）

奈良文化財研究所では、2011年度から橿原市法花寺町地内の水路改修にともなう調査を実施しています。工事予定地は東二坊大路の推定地に重なっています。

今年度の改修予定地は全長南北約100mです。コンクリート製水路の設置予定ラインを中心として、東西それぞれ1.5mの広さで調査区を設定しました。調査では、現水路の両岸を掘削し、壁面で土層を観察しつつ、遺構面の検出に努めましたが、当初の調査区内では遺構がほとんど削られていました。そこで、西に5カ所、東に2カ所の計7カ所の拡張区を設けたことにより、東二坊大路とその東側溝を平面的に確認することができました。

条坊側溝内からは、飛鳥時代後半の土師器杯（つき）・高杯（たかつき）・甕（かめ）、須恵器杯・高杯・鉢・甕のほか、転用硯が出土しています。また、複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦等、藤原宮の建物に用いられたと考えられる瓦も出土しています。

藤原京は、宮殿域を中心に十条十坊の範囲に設計されたとする説が現在では有力です。碁盤の目のような東西南北の道路は1本の総延長が約5.3kmにもおよぶため、調査は部分部分でおこなうことになります。それぞれの調査での測量データを蓄積していくことで、当時の道路位置を推定することができます。今回の調査で確認できた東二坊大路の遺構は一部分でしかありませんが、この成果は藤原京の道路の位置や設計精度を知る上で手がかりとなるものなのです。

（都城発掘調査部　南部 裕樹）

調査区全景（北から）

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次）

2013年4月8日に開始した藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査は、途中約3カ月半の中断を挟んで、2014年2月5日までおこなわれました。中断前の状況は50号に書かれていますので、本号では、9月半ばの調査再開後の成果を紹介したいと思います。

再開後は、調査区全域で検出していた礫敷の一部を除去し、下層の状況を調査しました。その結果、東西方向に延びる柱列や、大小複数の沼状遺構等が見つかりました。

東西柱列は約3m（10尺）間隔で、19基の柱穴を確認しました。長さは54m以上におよび、更に調査区の東に延びる可能性があります。柱穴は直径30cm前後の不整円形をしており、埋土に礫を含んでいることから、礫敷上から掘り込んだと考えられます。また、柱穴直上の礫敷面は、周囲よりわずかに盛り上がっていました。

沼状遺構は、これまで大きな一つの遺構であると考えていましたが、今回の調査で、大小複数の沼状遺構が隣接して存在していることがあきらかとなりました。いずれの沼状遺構も、埋土には木屑が含まれ、岸付近に瓦が多量に捨てられている場所もありました。木屑や瓦は、藤原宮の造営にともなって廃棄されたものと考えられます。

以上のように、今回の調査では、朝庭の空間利用や藤原宮の造営過程を考える上で、貴重な手がかりを得ることができました。東西柱列は、仮設の塀あるいは儀式にともなう施設等の可能性があります。沼状遺構の性格等とともに、周辺の調査成果をふまえながら、検討を深めていきたいと思います。

（都城発掘調査部　桑田 訓也）

調査区全景（南東から、右奥は耳成山）

薬師寺十字廊の調査（平城第519次）

薬師寺は天武天皇9年（680）に天皇が皇后（のちの持統天皇）の病気平癒を祈願して発願した寺院です。これが現在は本薬師寺と呼ばれる藤原京の薬師寺で、橿原市城殿町にその跡地があります。その後、和銅3年（710）の平城遷都にともなって、薬師寺も平城京右京六条二坊に寺地を移しました。

十字廊は、奈良時代後半の建立とされ、国内はもとより海外でも同じ名称の施設は見当たりませんが、長和4年（1015）に書かれた『薬師寺縁起』によれば、食殿とも呼ばれていました。類例がないためその機能は明確ではありませんが、食殿という別称から考えると、廊としての機能だけでなく、南側に隣接する食堂に付帯する機能をもっていた可能性があります。

十字廊の西半分は、奈良文化財研究所が1978年に発掘調査をおこなっています。今回は、十字廊の正確な位置や規模をあきらかにするために中央部以東を主たる発掘調査対象としましたが、十字廊と僧房の一部である東小子房の関係や十字廊の北端をあきらかにすることもあわせてねらい、調査区を設定しました。調査面積は合計872㎡で、そのうち新規発掘部分は768㎡です。調査は2013年9月17日に開始し、2月28日に終了しました。

発掘調査の結果、十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定しました。また、東小子房をはじめとする、十字廊と同時期に存在したと考えられる周辺の施設群に加え、瓦や土器を廃棄した土坑等、十字廊廃絶後の遺構も多数検出しました。

十字廊については、柱を立てるための礎石の据付痕跡を東西廊桁行7間分、南北廊桁行4間分、今回の調査で検出しました。南北廊の桁行については、後世の遺構による破壊のため、基壇北端の付近では据付痕跡が検出できませんでしたが、基壇規模から考えると更に1間北にのびる可能性があります。これに過去の調査成果をあわせると、十字廊は、東西廊が桁行11間・梁行1間、南北廊が桁行4間ないし5間・梁行1間、東西141尺、南北49尺以上の建物と推定されます。

『薬師寺縁起』によれば、十字廊の規模は、東西14丈1尺（141尺）、南北5丈6尺（56尺）とされており、今回の調査結果はこれにかなり近いものとなっています。

一方、十字廊の北側には通路と推定される南北にのびる石敷と、その北側に位置する礎石建物や、東へと続く掘立柱建物を検出しました。また、十字廊の東側には、東小子房や、東西を隔てる塀とみられる南北柱列を確認しました。東小子房の北側柱列は十字廊の南側柱列と同一線上に位置し、また南北柱列は東小子房の西側柱列と同一線上に位置します。このように、これらの建物の配置には高い計画性が見て取れます。

十字廊は西側で西僧坊、東側で東僧坊、南側で食堂と隣接しており、更に北側は石敷通路を介して他の施設へとつながっていました。北側に調査のメスを入れたことで、十字廊がなぜT字形ではなく「十字」形をしていたのか、新たな手掛かりが得られました。　（都城発掘調査部　庄田 慎矢）

調査区全景（北東から）

十字廊の北方に位置する石敷（北東から）

キトラ古墳壁画 白虎

2014年春、キトラ古墳の壁画たちが東京国立博物館での公開のために、初めて旅立ちました。その中で、注目の１体を紹介しましょう。

キトラ古墳の白虎。約1,300年前に石室の西壁に描かれたもので、その大きさは全長42cmほど。多くの方が思ったよりも小さいと感じるのではないでしょうか。しかし、実物の白虎を目にすると躍動的な姿に驚かされます。前脚を突き出し、尻尾を絡ませた後脚は大きく開き、体毛が流れる様は、まさに大地を駆けているようです。また、一般的な白虎の描かれ方と異なり、何故か右を向いている理由等、まだまだ謎が残されています。

飛鳥時代に描かれたとは思えない神秘的な美しさ、そして謎を秘めたキトラ古墳壁画白虎の魅力は語りつくすことはできません。

（前飛鳥資料館　成田 聖）

キトラ古墳壁画白虎（実寸大）

第５回日中韓建築文化遺産保存国際学術会議の開催

奈良文化財研究所では、中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所とともに、建築文化遺産とその保存に関する共同研究を進めています。2013年度は、第5回となる国際会議を11月13・14日に奈文研でおこないました。

今回のテーマは、「集落・町並みの調査と保存・活用」です。日本での文化財制度の下では、集落・町並みは伝統的建造物群保存地区として保存がはかられ、現在までに86市町村106地区が、国から重要伝統的建造物群保存地区として選定されています。住まいとして生き続ける伝統的な集落・町並みは、さまざまな現代的要求にさらされています。その保存と活用には、制度的な側面、保存対策を施すための基礎調査、そして地域住民の方々の理解や協力によるまちづくりの活動が欠かせません。そこで、3国の制度、調査方法、保存・活用の取組について発表をおこない、諸活動の問題点を共有し、新たな視点や解決策について活発な討論や情報交換がなされました。

韓国では世界遺産を見据えて精選された8地区が重要民俗文化財として指定されており、それらの保存・活用への取組について発表がありました。中国では歴史文化的名城名鎮名村として350地区が選定され、2013年度の申請は275地区におよぶ申請があったことが報告されました。広大な国土の膨大な数の伝統的集落・町並みへの取組について発表がありました。日本側からは、奈文研で現在おこなっている調査について報告し、亀山市のまちなみ文化財室嶋村明彦室長から、重伝建地区「関宿」の保存・活用の実際について発表していただき、各国の研究者が熱心に聴き入っていました。（都城発掘調査部　黒坂 貴裕）

会議討論の様子

日韓共同研究中間成果発表会

2013年11月8・9日、大韓民国ソウル市の清渓川文化会館において「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間成果発表会」を開催しました。奈良文化財研究所と韓国国立文化財研究所は、1999年に協定書を締結しました。これに基づき数年ごとに共同研究合意書を取り交わし、現在、「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」に取り組んでいます。これまでの共同研究の成果は『日韓文化財論集』Ⅰ、Ⅱとして刊行してきました。今回の発表会は、2011年度の合意書にもとづくもので、研究状況の確認、課題の共有、討議により、研究成果の質的向上をはかることを目的としています。

奈文研からは、馬場主任研究員が「東アジア文字文化研究の深化を目指して」、諫早研究員が「新羅における初期金工品の生産と流通に関する一試論」、小田研究員が「古代日韓における有蓋台付椀の製作と展開について」、廣瀬研究員が「日韓壁画古墳および王陵級古墳の比較研究」と題し発表をおこないました。

韓国側からは、権宅章学芸研究士が「考古遺物にみられる文字記号に関する研究」、李恩碩学芸研究官が「韓日古代馬具製作方法研究」、韓志仙学芸研究士が奈文研の庄田研究員との共同研究成果として「食器と調理器具にもとづく韓日古代都城における飲食文化の復元研究」、申淙宇学芸研究士が「韓日大型古墳空間構造映像化のための物理探査研究」、徐民錫学芸研究士が「韓日古生物遺体比較分析研究」と題し発表をおこないました。発表後には自由討論の時間を設け、発表内容について質疑応答をおこないました。

本発表会では、相互の研究現状を把握し課題を共有するとともに、いくつかの問題について、さまざまな角度から濃密な議論をおこないました。今後の研究成果の取りまとめ、『日韓文化財論集』Ⅲの刊行に向け、大変有意義な会となりました。　（都城発掘調査部　清野 孝之）

今回の共同研究中間成果発表会の出席メンバー

復興事業にともなう発掘調査に対する奈良文化財研究所の取り組み２

東日本大震災の被災各地では、復興事業にともなう多数の発掘調査がおこなわれ、全国の地方公共団体から派遣された多くの埋蔵文化財専門職員の方々がその支援にあたっています。奈良文化財研究所としても、派遣要請が出された場合、その内容に応じて即座に職員を派遣する体制を整えています。今年度上半期には、福島県広野町や宮城県気仙沼市に職員を派遣し、発掘調査やその後の出土遺物等の整理報告についての支援をおこないました。この様子については、49号に記しています。

この取組の一環として、2013年11月から2014年1月のおよそ3カ月間、福島県南相馬市の椴木沢（もみのきさわ）C遺跡および横手古墳群の発掘調査支援のため、数名の研究員を交代で派遣しました。前者は古代の製鉄炉や木炭窯等を含む製鉄遺跡、後者は古墳時代の円墳でともに記録保存対象の遺跡です。それぞれで遺構の検出、記録作業をおこない、3Dレーザー測量等遺構記録の効率化をはかる技術も導入しました。

日頃奈良で調査しているわれわれの多くは、東北地方での発掘は未経験でしたが、地元の調査員の方々と協力しながら調査をおこないました。様々な組織に属する専門職員が一緒に調査をおこなうことは、現在の特殊な状況下でのことではありますが、多くの「目」で遺跡を見つめ議論することで、調査をより効率的に進めることができたと思います。

被災地の復興事業はむしろこれからが本番です。今後も奈文研による支援事業を継続していく予定です。

（都城発掘調査部　芝 康次郎）

椴木沢Ｃ遺跡での調査の様子

遼寧省文物考古研究所との共同研究

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2013年11月に遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所並びに朝陽市と北票市で、遼西地域東晋十六国期都城文化関連の遺跡・遺物を調査しました。今回は11月23日から30日までの8日間、遺物の調査とともに三官営子（さんかんえいし）遺跡を踏査しました。調査者は、計4名でした。

今回の調査対象は、遼寧省文物考古研究所等によって北票市で発掘調査された、金嶺寺遺跡出土瓦および大板営子（だいばんえいし）遺跡出土金属製品です。これらの遺跡は慕容鮮卑（ぼようせんぴ）族の活動した三燕時期にあたり、3世紀から4世紀にかけてのもので、日本の古墳時代に相当します。瓦は、軒丸瓦を主体に全体で60件余りを調査しました。遺物の熟覧・調書作成、拓本・実測、撮影等、考古学的調査が主体でした。製作技法について新知見がいくつかあきらかになってきています。大板営子遺跡出土金属には、金・銀・銅・鉄製品が含まれていますが、鉄製品には錆のために形の不明瞭なものもあります。そのため、まず、それらの種類を見極める基礎的な作業が必要です。また、日本と中国で製品名の異なるものもあり、それを確認することも不可欠です。そのため、今回の調査では、出土品一覧表の作成から始めました。その一覧表が完成したので、今後はこれに基づいて様々な調査を実施する予定です。金属製品についても一部、熟覧、実測、撮影等をおこないました。

これらの調査に加えて、今年度3月の調査計画や来年度の共同研究計画について、遼寧省文物考古研究所の李新全書記らと、協議をおこないました。

（都城発掘調査部　小池 伸彦）

遼寧省文物考古研究所での出土品調査の様子

飛鳥資料館　春期特別展「いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―」

仏教が伝来した飛鳥時代は、文明開化ともいわれる変革の時代でした。巨大な瓦葺き建物や高層の塔、金色に輝く仏像、きらびやかな荘厳具等に象徴されるように、異国の仏教文化が、最新の知識や最先端の技術とともに飛鳥にもたらされました。

仏教文化の興隆と律令国家建設の進展にともない、首都飛鳥の地では、金・銀・銅・鉄等の金属製品をはじめ、土器・瓦等の窯業製品、漆製品やガラス製品等、さまざまな「ものづくり」がおこなわれました。

本展覧会では、飛鳥時代の工房遺跡から出土した考古資料を通して、いにしえの技術者―匠たちの技術体系に迫りたいと思います。飛鳥時代の「ものづくり」の技や知恵をご覧いただくとともに、復元製作実験の成果等、「古代と現代の匠の対話」もお楽しみください。　（飛鳥資料館　丹羽 崇史）

飛鳥池工房遺跡の金･銀坩堝と金片・銀片

会　　期：2014年４月25日（金）～６月15日（日）期間中無休
開 館 時 間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
記念座談会：５月11日（日）13：30～
ギャラリートーク：４月26日（土）13：30～　５月11日（日）10：30～　５月24日（土）13：30～
ホームページ：http://www.nabunken.jp/asuka　お問合せ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）
※2014年４月１日より観覧料が一般 270円になります。

平城宮跡資料館「木簡（もっかん）の展示」

平城宮は、木簡の一大消費地です。平城宮跡資料館にも木簡の展示コーナーがあります。そこで、今回は「木簡の展示事情」について少し紹介しましょう。現在、資料館の常設展で展示されている木簡は、ほぼすべてレプリカ（複製）です。木簡は、光や温湿度の変化に弱く、実物を公開するのは毎年秋に開催する「地下の正倉院展」で、１点の木簡につき展示期間を２週間に限っています。平城宮・京出土の木簡は、他の博物館の企画展に出品依頼を受けることもあります。適切な温湿度管理のもと展示していただくことを条件にお貸ししていますが、実物木簡の展示期間は２週間なので、企画展の開催期間を考えてレプリカも一緒に貸し出すことが多いです。近年、古代の文字に関する企画展が各地で開催され、資料館の木簡たちはひっぱりだこです。　（企画調整部　渡邉 淳子）

資料館 遺物展示コーナーの木簡たち

開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
休 館 日：月曜（５/５は開館、５/７休館）
ホームページ：http://www.nabunken.jp/heijo/museum　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

平城宮跡資料館 ロビー展示
2014年３月12日（水）～
「震災復興調査とその支援」

藤原宮跡資料室 ロビー パネル展示
2014年１月23日（木）～５月頃予定
「震災復興調査とその支援」

飛鳥資料館 春期特別展
2014年４月25日（金）～６月15日（日）
「いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―」

■　記　録

現地説明会
○飛鳥藤原第179次発掘調査（藤原宮朝堂院朝庭）
2014年12月21日　337名
○平城第519次発掘調査（薬師寺十字廊跡）
2014年２月15日　350名
○平城第520次発掘調査
（平城宮跡第一次大極殿院地区）
2014年３月８日　715名

飛鳥資料館 特別公開
2014年１月17日～26日
「発見30周年記念　キトラ古墳壁画特別公開」
4,008名

飛鳥資料館　冬期企画展
2014年２月14日～３月16日
「飛鳥の考古学2013」　1,851名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2014年3月